

区制100周年記念

みなとの100年、みんなの物語
～これまでも これからも この地域と～

港区には、地域ごとに紡がれてきたまちの物語があります。区制100周年を機に、その過去と今を語り合い、これからの未来をともに思い描くインタビュー企画をお届けします。

田中地域

田中地域は、中央大通北側の田中エリア、中央大通とみなと通に挟まれた夕風エリアで構成。田中エリアは、低層住宅を中心とする住居エリア、夕風エリアは、かつて商業地としてにぎわいましたが、近年は商業施設の減少が目立ちます。港区の地名は新田開発を行った町人に由来するものが多く、田中地域は田中又兵衛にちなんで名づけられたとされています。今回は、その田中地域で防犯・防災活動に携わっている穴吹さんにお話を伺いました。

災害の経験を教訓に、進化する地域防災

田中小学校のPTA会長をきっかけに、地域と関わるようになった穴吹さん。2015(平成27)年から昨年まで、地域防災リーダーの隊長を務めてきました。地域防災リーダーは阪神淡路大震災を契機に組織化されたものですが、穴吹さんの就任当時は東日本大震災を受けて、防災のあり方が見直されていた時期でした。避難所の開設訓練が本格的に始まり、津波を想定した垂直避難の必要性も、この頃から広く認識されるようになったといいます。

2018(平成30)年の大阪北部地震の後、防災学習会への参加者が一時的に増加。2020(令和2)年以降はコロナ禍により、受付での検温や避難者の振り分けなど、避難所の運営にも対応が求められました。実際の災害や社会状況によって、変化してきた地域防災。穴吹さんは「建前の訓練ではなく、本当に災害が起きたときに、誰がどう動くかをより現実的に考える時期に来ているのでは」と考えています。

楽しく伝える防災、子どもたちにも関心を

その中で穴吹さんは、「いかに多くの人に防災意識を持ってもらうか」に心を砕いてきました。防災学習会の内容を見直し、防災リーダーによる寸劇を企画。津波が来た時に何を持ってどこへ逃げるかなどを、物語に盛り込んで上演しまし



た。「5～10分の簡単なものですが、ちょっとでも関心を持ってもらえたら、と考えました。それに、僕ら防災リーダーが前向きに取り組む姿を見せることで、見る人の心にも届くのではないかと思います」。この寸劇は、区の防災アドバイザーの監修を受けながら、現在も継続されています。

今年6月には田中小学校体育館を会場に、子どもたちの防災意識を高めるためのクイズ形式の防災学習会を開催。楽しみながら学べる工夫が地域に根付いてきています。

未来に受け継ぎたい、つながりの力

田中地域は一戸建て住宅が多く、比較的子育て世代も多い地域。しかし、近年建てられるマンションの多くは単身者向けのワンルームで、ファミリー世代は減少傾向にあります。民泊の増加もあり、街の風景は少しずつ変わりつつあるのが現状です。

それでも、「みんな団結力が強くて、他の地域や区役所の方から、“田中はまとまっていますね”とよく言われるんですよ」と、穴吹さんは笑顔で語ります。若い世代に地域活動を引き継ぎたいという思いはありつつも、「現役世代は忙しいから」と理解もにじませます。それでも子ども会の若いお父さんたちが関わってくれることもあり、希望も感じているようです。自身も現役で働いていた頃から地域活

動に携わってきた穴吹さんは、「日常的にコミュニケーションがあって、つながりのあるまち。私も活動を通じて、地域に居場所ができたと感じています」と振り返ります。

避難所機能を備えた地域拠点が理想

今年、港区は区制100周年を迎えました。穴吹さんは区制70周年のときに田中小学校のPTA会長を務めており、地域でおみこしを作って御堂筋パレードに出演したそうです。

それから30年、この節目の年にこれからの地域のあり方について何うと「住む人が増えることで地域が活性化すると思うので、それが叶うような施設ができればいいですね」と話します。そして、「できれば、避難所機能も備えた施設があったら一番いい。いざという時に避難できて、ふだんは地域のコミュニティの場にもなるような、そんな場所があるといいですね」と、地域の未来に向けた希望を語ってくれました。



穴吹 正信 さん

大阪市住之江区出身。結婚を機に妻の実家がある港区に転居。田中小学校のPTA会長をはじめ、地域振興会の広報や地域防災リーダーなどを歴任。保護司として18年、少年補導員として22年にわたって活動し、現役時代から仕事と地域活動を両立しながら長年にわたり地域に貢献している。

弁天地域

弁天地域は、JR大阪環状線とOsaka Metro中央線が交わる交通の要所であり、中央大通や国道43号といった幹線道路にも面した利便性の高いエリアです。大阪ペイタワーを中心とした商業施設など、区の玄関口としての顔も持っています。今回は、そんな弁天地域で連合の女性部長・主任児童委員として活動する森田春美さんに、地域の取り組みについてお話を伺いました。

子どもたちのためにできることを

森田さんが主任児童委員になったのは12年前。末っ子が小学校を卒業するタイミングで民生委員を打診されたことをきっかけに、「子どもたちのために何かできることがあれば」との思いから主任児童委員に就任しました。

現在は、未就学児とその保護者を対象にした「子育てサロン」に加え、独自の取り組みとして地域の会館等で「こどもの居場所」を毎月開催。弁天小学校の児童やその兄弟を対象に、広い畳の部屋を開放しています。「15～16人が集まると、子どもたちの熱気で部屋が狭く感じます」と笑顔に。もう一人の主任児童委員によるバルーンアートも人気



で、子どもたちにとって楽しい居場所となっています。

世代をこえてつながる地域の力

地域活動が続ける中で、森田さんの印象に残っている出来事があります。PTA役員を務めていた当時、夏休みに生涯学習で「子ども和太鼓教室」を開催。それから数年後、思いがけない再会がありました。「一昨年の盆踊りのときに、20歳くらいの男の子が声をかけてくれて。誰かと思ったら、その和太鼓教室に来ていた子だったんです。今は地域防災リーダーになっていると聞いて、びっくりしました」。

若い世代が、地域の仕事を引き受けてくれていることがうれしかったと森田さん。子どもたちと地域との関わりを作ることの大切さも感じたと言います。「どんな活動をしているのかを知ってもらうことや、地域の会館に行ったことがある、地域の人の顔を知っている、そんな小さな接点の積み重ねが、将来地域の一員として関わってくれるきっかけになると思います」。

「楽しい」から、若い世代も多く参加

地域活動に対して「抵抗はなく、むしろ楽しんでいる」

と話す森田さん。弁天地域では40～50代も多く参加しています。「先輩の世代が皆さん優しくして。参加できないときは無理をせず、できる人でやろうと言ってくれるので、引き受ける側も気が楽なんです」。そのおかげで現役世代も参加しやすく、連合の親睦旅行も「みんな楽しく参加しています」とのこと。順調に世代交代が進んでいます。

一方で、心配しているのは、PTA活動の縮小傾向です。森田さん自身も、地域との関わりはPTA役員から。小学校でお祭りを企画した際には、当時の女性部長が豚汁やぜんざいをふるまい、行事を支えてくれたことが印象に残っているといいます。「PTAと地域のつながりがあったからこそ、自然と地域活動に関わる流れができていたんです」。しかし、コロナ禍で行事が中止・縮小されたことで、そうしたつながりが薄れてしまうのではないかと懸念も抱いています。

助け合いが生む信頼、にぎわうまちへ

生まれ育った弁天町への思いも、森田さんの活動の原動力。「昔は何かあると、すぐに近所の人が駆けつけてくれました。今は“迷惑をかけない”ことが重視されがちですが、ちょっとした助け合いは必要では。女性部長の活動で教わった“人に頼られるのはうれしいこと。遠慮しすぎると、その喜びを奪ってしまうかもしれない”という言葉が心に残っています」。

これからの港区については、「子どもたちが希望を持てる港区であってほしい」と願っています。弁天地域としては「もっといろいろなお店ができて、にぎやかになれば。中崎町や福島のように、人が集まる場所になる可能性が弁天にもあると思います」と期待を寄せています。



森田 春美 さん



大阪市港区出身。みなと幼稚園、弁天小学校、市岡中学校を卒業した生粋の港区民。弁天小学校のPTA役員をきっかけに地域活動に参加し、現在は主任児童委員として子どもや子育て支援に携わっている。「弁天会館老人憩いの家」月1回の子育てサロンと、毎月第4土曜に「こどもの居場所」を開催中。